

私の出会った人々(五)

安島 智子

〈はじめに〉

登校拒否の問題は、社会や学校、あるいは家族や個人の生育歴といった様々の視点から取り組まれている。特に最近では家族療法のような家族力動をシステムティックに操作することによって問題の解消を計る方法も効果をあげているようである。私もその時々でより適切と思われる方法を駆使して取り組んで来たが、実際には様々な考えを総合的に捉えつつ、各々の立場で、その方法を主として活用し、学校や家庭との連携をとっていくという事であろう。確かに学校や家庭における事柄が個人を苦ししい状況に追い込んでいることは私も痛感する所であ



り、その面からのアプローチの重要性を感じている。しかしまた一方では、個人の内的世界にその人の創造性（生成性）が十分に現れ出るような変容を遂げたとき、その個人は現実の場面においてもその人らしい社会参加が可能となるということもしばしば体験されることである。さらに子供に起きた出来事であっても、母親の傷が癒されたり、こだわりが楽になり、母親本来の生命（生成性）が流れ始めるような変化が起きると、子供の状態も共時的に変化し、ひいては家族力動の変化をもたらす事も経験される。

限られた紙数でどこまで書けるか自信はないが、今回は一人の母親の夢を巡って、この問題を考えたいと思う。

〈お子さんの登校拒否をきっかけに来談された千草（仮名）さんの夢を巡って〉

千草さんの家族は、大手企業に勤務するご主人（45歳）、千草さん（42歳）、長女（16歳）、長男悟（仮名）

君（12歳）の四大家族である。東京の郊外に家を建てて住まい、一見いかにも幸せそうなご家族である。

千草さんも悟君が生まれるまで短大の教師をされ、一時家庭に入ったが悟君が2歳半の時復帰した。しかし悟君の初めの登校拒否を機に退職し、現在は週に一、二度、老人家庭のヘルパーをされている。まじめな、しっかりした物腰の方で、担任の先生は「こんな良いご家庭で、良いお母さんなのにどうしてでしょうね」と言われたそうだ。こう語る千草さんの表情にも「どうしてなのか」という気持ちが隠せない。しかし千草さんの生き方にはどこか無理があるのかもしれない。

千草さんの長男悟君は、小5の2月より登校しなくなり、おう吐、腹痛、発熱、鼻血といった身体症状があった。また母親を殴る蹴るといった暴力もひどく、来談前頃（小6、6月）は母親の首にコードを巻き付け、「殺してやる」と首を力いっぱい締めつけるなどの行為もあり、千草さんもひどく苦しい状態で来談された。

初回到千草さんは、悟君について「友達との付き合いもないし、このまま自己解体してしまうのではないかと訴え、千草さんの不安が相当のものであることが推測された。また「保育園ではおとなしく、先生には『良い子』と言われていたが、家では玩具箱をひっくり返して部屋じゅう散らかしたり、襪を破いたり無意識的には私にたいして不満があったのでしょう」と語られた。しかし、2歳半まで育児日記をつけられたと言うことから、千草さんは一生懸命悟君をお育てになったものと思われる。それにもかかわらず、悟君は不満であったとすれば、どのような事が悟君をそのような気持ちにさせるのであろうか。

悟君はまた、小3の時にも10カ月登校しなかった事があり、本児の不登校は今回が二回目である。そのため本人は過去に教育相談室や、病院を幾つか経験しているが、それが嫌な体験として残っているとのことで、今回は一切の治療機関への来談を拒否した。母親だけの来談となった事もあり、この面接では千草さんの見た夢も取

り混ぜて話し合っていくことを考えた。初回到その旨提案したところ、すぐに夢が報告された。

―兎とのかかわりの始まり―

初回 夢1 誰にもなつかない兎が穴から出てこないのを見て、「そのうち慣れるわよ」と言っている。他の人が行ってもだめだったが、私が行くとなつて遊んだ。

この兎は悟君とも千草さん自身とも受け取れる。兎からイメージされる二人のふわっとしたやわらかな生命が穴に隠れなくとも守られる時が来ることが予期され、それはとりも直さず千草さんが内なるご自身との関わりを持ち始めた事によるものであろうか。

悟君はかつて学校に行けずに病院に行った時、「今まで一番楽しかった事は？」と尋ねられ、「何もない」と答えたという。家では、時刻表や、地図、国旗の絵図をたんねんに見て過ごしている事が多く、絵は電車の絵

ばかり描いているということであった。

この悟君の遊びについて語るのは別の機会に譲ることにするが、千草さんにしても、「主婦はつまらない。」「何もしたくなくて店屋物をとることもある」と話され、何かこの姿には空虚感を感じる。何に捕らわれることよってエネルギーが使われてしまっているのであらうか。一方、老人のお世話には生きがいを感じておられ、千草さんの中には老人に向かわせる何かがあるのであらう。また「老人は寂しいと思う」と語った千草さんの孤独も感じられたのであった。

—イニシエーション—

七回目にも夢が報告された。

夢2 通りがかつたら、知り合いの主婦二人が花嫁姿になっていた。和装の白無垢を着ていたが、お色直しで白いワンピースになり、私は「すてきね、すてきね」と言っている。一人は嬉しそうで、一人は嬉しそうでない。社社のような所だった。

イニシエーションの夢として受け取れる。内的な意味で娘としての千草さんの死と妻として、母としての再生が起ころうとしているのではなからうか。嬉しそうな花嫁とそうでない花嫁が登場し、結婚の両面を知りつつそれを受け入れていくということかもしれない。内的な意味では千草さんはまだ実家の娘であったであらう。人生において決定的な段階を迎えるとき、その人のイニシエーションが必要になって来る事がある。まさにその時を迎えていたのであらうか。

— 太母の現れ —

夢3 一びきのまむしがトグロを巻いていた。「あつまむしがいる」と思ったら、場面が変わってまむしが変身して蛇になり、ボンボン飛びかかって来る。「欽ちゃん(萩本欽一)助けてー」と叫んだ。すると蛇は毒蜘蛛に変わっていた。周りの人は笑っている。じゃれているというか、そうだったのだらう。

このまむしは母なるものもう一面であろうか。力強い生命力ではあるが、また巻き込み飲み込む力をも持つそのすさまじい力を前に「あっ」と息を飲み、たじろいだのかもしれない。さらにまむしは蛇にも、毒蜘蛛にも変身して攻撃してくる。この恐怖ゆえに、この夢を喜劇にすることで千草さんのバランスを保ったのかもしれない。

この夢を報告して、千草さんは小さい頃、蜘蛛と蠍あわさった顔をした銭形の斑点のある蛇の夢を見た事を思い出した。

千草さんは子供のころから無意識にこうした自分を脅かす太母の力に巻き込まれて来たのかもしれない。またこの内的な母なるものは千草さんにとって、夢1の兎に象徴される柔らかで、フワッとした暖かさで心地よさを持つ母なるものとも存在を一にするのであろう。二つの夢はこの両面を意識の光のもとに引き出すことができただけではなからうか。

—母の死—

八回 夢4 私の母が死んだ時の夢だった。母は何を持っていったのかしらと思ひ、母のハンドバックを開けてみると中に、私が母に送った手紙が入っていた。

この後母親が死んだ時が話された。母親は悟母が生まれた時のお産扱いに上京し、しばらくいっしょに暮らして兄夫婦のもとに帰ったが、その後身体具合が悪くなり、気管切開の手術を行った。千草さんが反対したにもかかわらず、兄夫婦は母親の手術を断行してしまい、手術後亡くなるまでの病院生活は上半身に機械をつけ続けるといふ、苦しく、悲惨な日々であった。これらの一連の出来事で千草さんはひどく傷つけられたに違いない。この傷が癒されることのないままにきたのではなからうか。

さらにまた、日頃から何かと母親に対してひどい仕打ちをしていた兄嫁に対し、兄嫁が母の手術に積極的だっ

たことや、その後も看病をしなかったことなど、兄嫁に
対する強い怒りも表した。さらに母親の手術を知らされ
て、1歳半の悟君を置いてかけつけたことや、その夜悟
君が泣き続けたというので、その後は連れて看病に通っ
たことなどが話された。

千草さんがしまいこんできた諸々の思いをここで初め
て表すことができたのであろう。ハンドバックの手紙に
はこの思いが書かれていたのかも知れない。また悟君
は、再接近期における1歳半危機の時期に心理的には見
捨てられる体験がされていたり、おばあちゃんの事で夢
中になっている状態の母親に世話をされていたらしい。
この頃本人が「僕なんか生まなきやよかつたのに」と
言ったり、小さい時のことをよく尋ねるといふことだっ
たが、千草さんの心の動きとどこか対応しながら悟君の
様子も変化しているように思われる。

―自己への旅―

九回 夢5 私人脈やかな通りにいる。インドの街

のようだ。仏教の会館があつてそこで白装束の人たちが
ずらつと並んでお経をあげている。「どうしてお経をあ
げているの？」と尋ねると「平和のため」と言うが表情
がない。私が目指す所は高い塔だった。白いスニーカー
を手に持って裸足で歩いていった。川沿いに降りて行く
と、学校時代の舎監の先生に会った。「上がって行きな
さい」と言われ、川の水で足を洗い、持っていた汚い洗
濯物で足を拭いた。スニーカーを履こうとするが入らな
い。

精神的な旅の夢ではなからうか。自分を納得させる高
みを求めて、素足で大地を踏みしめている。思春期の少
女の自己確立への歩みが連想された。舎監の先生との出
会いは、内なる少女に起きた出来事を物語っているので
はなからうか。どんなにお経を唱えても、生きた表情が
ないのは自分が目指すところと違うという、少女の初々
しさが感じられる。川の水で足を洗ったことも一つの儀
式だったのかも知れない。靴がはいらなくなった。少女

の足は幾周りか大きくなったようだ。

千草さんは、宗教家であった亡き姑に母親がずいぶん痛められていたのが子供心に悲しかったこと、またその祖母は世間の人には人助けに熱心な立派な人と言われていたことなどを話した事があった。母親の悲しさを自らの悲しさとしながらも、祖母の偉大さに引かれる気持ちと、宗教をしているのにどうして家の中ではこんなに冷たいのだろうかという気持ちが無難に入り交じったまま来ているということであった。自らの宗教性を求めることを確かにすることで祖母からも一つ自由になれるのではなからうか。

―死と再生―

十四回 夢6 山の頂上に二本木があった。一本は桜の花が咲いている。登るのが大変であったが、悟と夫が一生懸命花をとってくれる。花の咲いていない方の木の根に犬のベルが入り込もうとする。その木は穴が開いて

いるので通り抜けできる。でもその木の下には子供が殺されて埋められたということを近所の人から聞く。

二本の木は、生と死の相対立する状態が、同じ山の同じ土の中からもたらされるということを語っているのであらうか。そしてこの山は相対立するものを同時に許容する女性性・母性性とも捉えられようか。犬によって導かれた木の根の下の、穴の世界は死んだ子どもが還る死の世界でもあり、また桜の花に象徴される命を蘇らせる豊穣の世界でもありと考えられないであろうか。死を受け入れ、かつ再生をもたらずという両極の性質を持つ土の力が千草さんの内にも培われてきたのかもしれない。

千草さんはまた、この夢について「桜の花がお菓子のようにおいしかった。人が埋められたということもあるけれど、桜の花を食べたことできれいになった。」と話された。

これは、悟君の命を殺してきたのは自分なのではないかと苦しんでおられた千草さんが、この桜の花を食べる

ことよって許され、自らも新たな命を与えられるという
ことなのかもしれない。その桜の花を得るのに悟君と
ご主人に助けられたということも意味深い。

―魂を得る―

十六回 夢7 田舎の海に釣りに行く。鱈とかあいな
めとか大きな魚がたくさんいてすぐに釣れそうである。

悟に「鱈の大きいのがいるからすぐ釣れるよ」と言う
と、「あいなめでなければ釣らない」と言う。大きな形
の良いきれいなのがスイスイ泳いでいる姿が見える。確
かに釣りたいものだと思つた。

魚はキリストを象徴するものとして絵画や彫刻にも見
られるが、ここでは悟君の魂の象徴とも考えられよう
か。母親が悟君の釣りたい魚の姿に納得していることも
大事な点であろう。事実、悟君はあいなめの姿が好き
で、現実にもこの頃、良くつき合ってくれるようになって
た父親と、海に行つてあいなめを釣つてきたということ

であつた。

―新しい家・癒された母・義姉との和解―

十七回 夢8 新しい家に移転する。たくさんの人が
手伝いに来てくれている。新居は大変大きく広い庭があ
り、門や屋根つきを立派である。前の方は塀もなく広々
として道路が見える。母も手伝いに来てくれたが母
の部屋もきれいな和室で「疲れたらうから休んだら」と
私と姉が言っている。

たくさんの人が千草さんを助けている。もう孤独な感
じは受けない。新しい家は外の道路とも良い関係を作れ
るのではなからうか。千草さんにとって最も辛かったか
もしれない母親の姿は癒された姿で千草さんの心の内で
生きている。悟君にも「おばあちゃん、あの世で楽に
なつたらしい」と話したそうだ。

夢9 実家に帰ると義姉が母が好きだからと言つてい

ろいろなご馳走を作っている。今まで冷凍していた物まで解凍している。忙しそうなので手伝う。そして庭に出て、果物をとったり、きれいな花をとったりしている。

義姉との和解は何よりも千草さんを豊かにしてくれたであろう。

—水仙の花—

十八回 夢10 田舎の風景。庭の南天の木のところまで一生懸命お経をあげている白装束の人がいる。祖母から父母も揃っている。白装束の人は私にこの宗教に入り、お経をあげると子供が学校に行くようになると話す。私は子供は学校に行っていると言う。そして南天の下ところで水仙の花をとっている。

祖母の支配する家や親から本当に自由になったらしい。この時のご自身らしさは庭の南天の木の下の、水仙の花に象徴された姿ではなからうか。

千草さんの家庭も父親の存在が大きくなった。悟君は一年以上行かなかった小学校の卒業式に父親の強い態度に決心をして、両親とともに出席した。悟君にとっては真にイニシエーションとなった事であろう。中学は本人の希望で夜間に行くことにした。学校恐怖症は自立へのあがきと考える、と河合隼雄が言ったことがあるが、同時に親の自立への叫びでもあるのかもしれない。当然千草さんは私からも飛び立たれた。新しい仕事にも向かわれるということであった。

(このはな児童学研究所)

